

8 2 重積分の計算（累次積分）

8.1 縦線集合・横線集合上の 2 重積分

2 重積分の計算は次の定理を使うのが一般的である．この定理の証明はおまけとして 8.4 節で述べる．

定理 8.1. $f(x, y)$ を有界閉領域 D 上連続な 2 変数関数とする．

(1) 実数 a, b と閉区間 $[a, b]$ 上 $\varphi_1(x) \leq \varphi_2(x)$ かつ連続な関数 φ_1, φ_2 によって D が

$$D = \{ (x, y) \mid a \leq x \leq b, \varphi_1(x) \leq y \leq \varphi_2(x) \}$$

と表せるとき， $f(x, y)$ は D 上重積分可能で以下が成り立つ．

$$\iint_D f(x, y) \, dx dy = \int_a^b \left(\int_{\varphi_1(x)}^{\varphi_2(x)} f(x, y) \, dy \right) dx$$

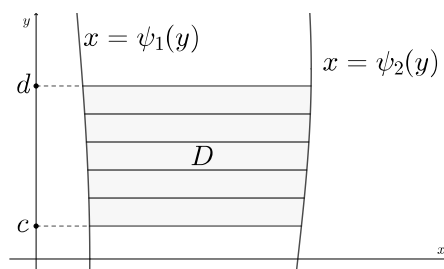
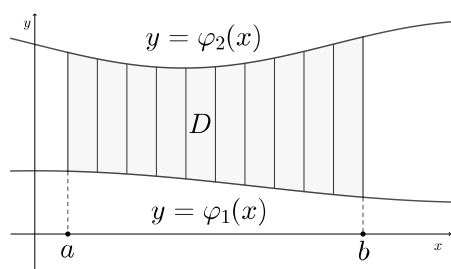
(2) 実数 c, d と閉区間 $[c, d]$ 上 $\psi_1(y) \leq \psi_2(y)$ かつ連続な関数 ψ_1, ψ_2 によって D が

$$D = \{ (x, y) \mid c \leq y \leq d, \psi_1(y) \leq x \leq \psi_2(y) \}$$

と表せるとき， $f(x, y)$ は D 上重積分可能で以下が成り立つ．

$$\iint_D f(x, y) \, dx dy = \int_c^d \left(\int_{\psi_1(y)}^{\psi_2(y)} f(x, y) \, dx \right) dy$$

定理 8.1(1) の D を**縦線集合**（左下図）といい，(2) の D を**横線集合**（右下図）という．



例 8.2. $D = \{ (x, y) \mid 1 \leq x \leq 2, 0 \leq y \leq x \}$ に対して， $\iint_D (x + y) \, dx dy$ は次のように計算できる．

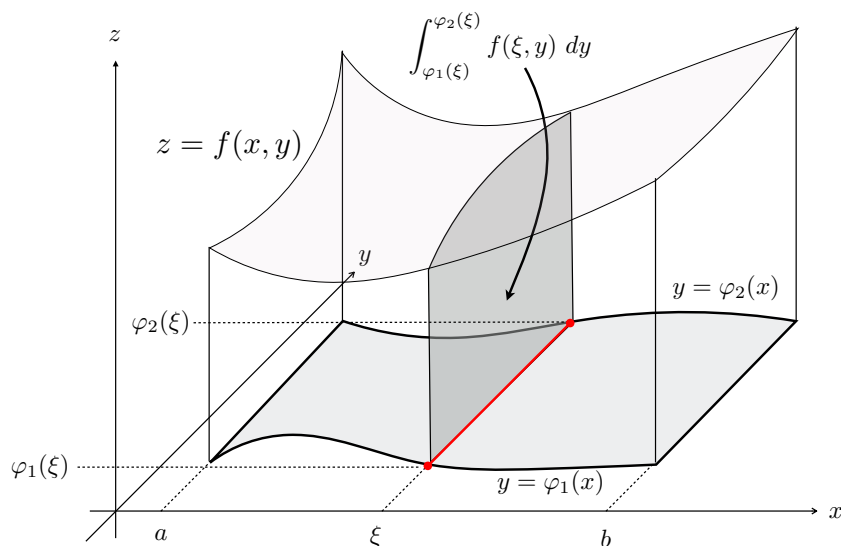
$$\begin{aligned} \iint_D (x + y) \, dx dy &= \int_1^2 \left(\int_0^x (x + y) \, dy \right) dx = \int_1^2 \left[xy + \frac{1}{2}y^2 \right]_{y=0}^{y=x} dx \\ &= \int_1^2 \frac{3}{2}x^2 \, dx = \frac{1}{2} [x^3]_1^2 = \frac{7}{2} \end{aligned}$$

8.2 定理 8.1 の幾何学的意味

2 変数関数 $f(x, y)$ の有界閉領域 D 上の 2 重積分は, D の境界に沿って伸びる xy 平面に垂直な曲面と xy 平面と $z = f(x, y)$ で囲まれる立体の体積に等しい. ただし, xy 平面よりも下側にある部分の体積は負の値として扱う. 定理 8.1 の累次積分の内側に

$$F(x) = \int_{\phi_1(x)}^{\phi_2(x)} f(x, y) dy, \quad G(y) = \int_{\psi_1(y)}^{\psi_2(y)} f(x, y) dx$$

と名前を付ける. $F(\xi)$ の値は下図のように平面 $x = \xi$ によって立体を切ったときの断面積に等しい. 同様に $G(\eta)$ の値は平面 $y = \eta$ で立体を切ったときの断面積に等しい. 従って, 定理 8.1 は**立体の断面積を積分したものが体積である**ことを主張している.



8.3 練習問題

次の2重積分を求めよう.

$$(1) \iint_D \sin(x+y) \, dxdy, \quad D = \left\{ (x,y) \mid 0 \leq y \leq \frac{\pi}{2}, 0 \leq x \leq y \right\}$$

$$(2) \iint_D x \, dxdy, \quad D = \{ (x,y) \mid y \leq x \leq \sqrt{y} \}$$

$$(3) \iint_D xy \, dxdy, \quad D = \{ (x,y) \mid x+y \leq 2, y^2 \leq x, 0 \leq y \}$$

$$(4) \iint_D \sin(\pi x^2) \, dxdy, \quad D = \{ (x,y) \mid y \leq x \leq 1, 0 \leq y \leq 1 \}$$

$$(5) \iint_D y \, dxdy, \quad D = \left\{ (x,y) \mid \frac{y}{2} \leq x \leq 2y, x+y \leq 1 \right\}$$

$$(6) \iint_D x \, dxdy, \quad D = \{ (x,y) \mid -2 \leq x \leq 1, x^2 + 4x + 1 \leq y \leq -x^2 + 2x + 1 \}$$

「積分基本問題集 式」(1) ~ (4), (11), (14), (15) も参考にしてください.

<https://github.com/kazutsumi/Integral2/blob/main/integral2.pdf>

答え : (1) 1 (2) $\frac{1}{12}$ (3) $\frac{3}{8}$ (4) $\frac{1}{\pi}$ (5) $\frac{1}{18}$ (6) $-\frac{1}{6}$

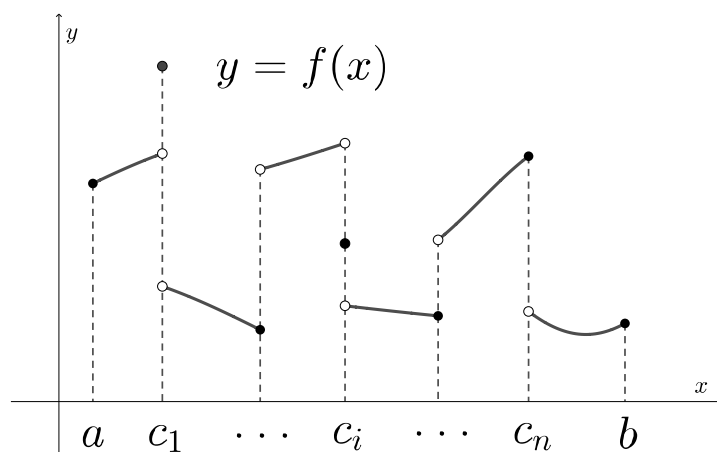
8.4 (おまけ) 定理 8.1 の証明

定理 8.1 の (1) を証明する. ただし, f が D 上で重積分可能であることの証明は省略する.

1 変数関数の積分に関する以下の定理 8.3 を使う.

定理 8.3. 有界閉区間で区分的に連続な 1 変数関数はこの区間で積分可能である.

有界閉区間 $[a, b]$ で定義された 1 変数関数 f が有限個の点 $c_1, c_2, \dots, c_n \in [a, b]$ を除いて連続で, 各 c_i における左側極限 $\lim_{x \rightarrow c_i-0} f(x)$ と右側極限 $\lim_{x \rightarrow c_i+0} f(x)$ が存在するとき, $f(x)$ は $[a, b]$ で**区分的に連続**であるという. ただし, 両端 a, b では区間の内側からの片側極限のみ存在すればよい. すなわち, a では右側極限が, b では左側極限のみが存在すればよい. 区分的に連続な関数は有界である. また, 連続関数は区分的に連続である.



有界閉区間 $[a, b]$ で区分的に連続な関数 f の積分は, 区分ごとの積分値を足し合わせればよい. つまり, 不連続な点 $c_1, c_2, \dots, c_n \in [a, b]$ ($c_1 < c_2 < \dots < c_n$) と $c_0 = a, c_{n+1} = b$ に対し

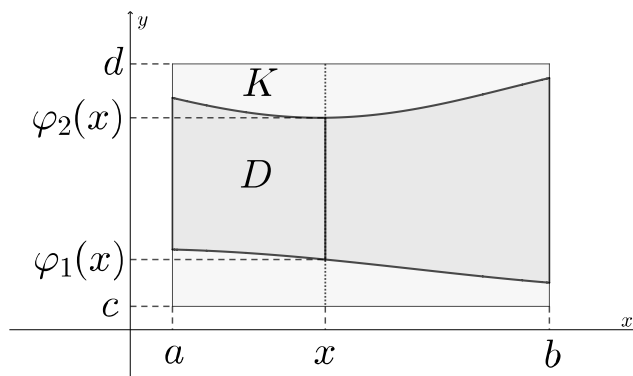
$$f_i(x) = \begin{cases} \lim_{x \rightarrow c_{i-1}+0} f(x) & (x = c_{i-1}) \\ f(x) & (c_{i-1} < x < c_i) \\ \lim_{x \rightarrow c_i-0} f(x) & (x = c_i) \end{cases}, \quad i = 1, \dots, n+1$$

とすれば, 各 f_i は $[c_{i-1}, c_i]$ で連続なので以下が成り立つ.

$$\int_a^b f(x) dx = \sum_{i=1}^{n+1} \int_{c_{i-1}}^{c_i} f_i(x) dx$$

定理 8.1(1) の証明.

下図のように D を含む長方形 $K = [a, b] \times [c, d]$ をとる.



ここで K 上の関数 f^* を

$$f^*(x, y) = \begin{cases} f(x, y) & ((x, y) \in D) \\ 0 & ((x, y) \notin D) \end{cases}$$

により定める. f は D 上重積分可能 (証明略) だから, 有界閉領域上の 2 重積分の定義から f^* は K 上重積分可能で,

$$\iint_D f(x, y) \, dx dy = \iint_K f^*(x, y) \, dx dy \quad (8.1)$$

である. 任意の $\xi \in [a, b]$ に対して, y の 1 変数関数 $f^*(\xi, y)$ は $[c, d]$ において $\varphi_1(\xi), \varphi_2(\xi)$ を不連続点とする区分的に連続な関数である. 従って, 定理 8.3 より $f^*(\xi, y)$ は $[c, d]$ で積分可能で,

$$\begin{aligned} \int_c^d f^*(\xi, y) \, dy &= \int_c^{\varphi_1(\xi)} f^*(\xi, y) \, dy + \int_{\varphi_1(\xi)}^{\varphi_2(\xi)} f^*(\xi, y) \, dy + \int_{\varphi_2(\xi)}^d f^*(\xi, y) \, dy \\ &= 0 + \int_{\varphi_1(\xi)}^{\varphi_2(\xi)} f(\xi, y) \, dy + 0 = \int_{\varphi_1(\xi)}^{\varphi_2(\xi)} f(\xi, y) \, dy \end{aligned}$$

である. 従って, 1 変数関数 $F(x) = \int_c^d f^*(x, y) \, dy$ が $[a, b]$ で積分可能で, かつ以下が成り立つことを証明すればよい.

$$\iint_K f^*(x, y) \, dx dy = \int_a^b \left(\int_c^d f^*(x, y) \, dy \right) dx$$

$\Delta = (x_0, \dots, x_m; y_0, \dots, y_n)$ を長方形 $K = [a, b] \times [c, d]$ の任意の分割とする. x 方向の各小区間 $[x_{i-1}, x_i]$ から代表点 ξ_i を任意に選ぶ. y 方向の各小区間 $[y_{j-1}, y_j]$ での $f^*(\xi_i, y)$ の最小値を $m_{ij} = f^*(\xi_i, s_{ij})$ とし, 最大値を $M_{ij} = f^*(\xi_i, S_{ij})$ とすると, 各小区間 $[y_{j-1}, y_j]$ で $m_{ij} \leq f^*(\xi_i, y) \leq M_{ij}$ であるから, 定理??より

$$m_{ij}(y_j - y_{j-1}) \leq \int_{y_{j-1}}^{y_j} f^*(\xi_i, y) \, dy \leq M_{ij}(y_j - y_{j-1})$$

である。これが各 i, j で成り立つので以下の不等式が成り立つ。

$$\begin{aligned} \sum_{i=1}^m \sum_{j=1}^n m_{ij}(x_i - x_{i-1})(y_j - y_{j-1}) &\leq \sum_{i=1}^m \left(\sum_{j=1}^n \int_{y_{j-1}}^{y_j} f^*(\xi_i, y) dy \right) (x_i - x_{i-1}) \\ &\leq \sum_{i=1}^m \sum_{j=1}^n M_{ij}(x_i - x_{i-1})(y_j - y_{j-1}) \end{aligned}$$

この不等式の左辺は Δ と $\{(\xi_i, s_{ij})\}$ に関する f^* の Riemann 和であり、右辺は Δ と $\{(\xi_i, S_{ij})\}$ に関する f^* の Riemann 和である。また、不等式の中辺は

$$\begin{aligned} \sum_{i=1}^m \left(\sum_{j=1}^n \int_{y_{j-1}}^{y_j} f^*(\xi_i, y) dy \right) (x_i - x_{i-1}) &= \sum_{i=1}^m \left(\int_c^d f^*(\xi_i, y) dy \right) (x_i - x_{i-1}) \\ &= \sum_{i=1}^m F(\xi_i)(x_i - x_{i-1}) \end{aligned}$$

である。これは区間 $[a, b]$ の分割 $\Delta_X = (x_0, \dots, x_m)$ と代表点集合 $\{\xi_i\}$ に関する 1 変数関数 F の Riemann 和である。よって、以下の不等式が成り立つ。

$$R(\Delta, \{(\xi_i, s_{ij})\}, f^*) \leq R(\Delta_X, \{\xi_i\}, F) \leq R(\Delta, \{(\xi_i, S_{ij})\}, f^*)$$

f^* は K 上重積分可能なので、 $|\Delta| \rightarrow 0$ のときこの不等式の左辺と右辺、従って中辺も、(8.1) に収束する。また、 $|\Delta| \rightarrow 0$ のとき $|\Delta_X| \rightarrow 0$ であるから、 F は $[a, b]$ で積分可能であり、以下を得る。

$$\begin{aligned} \iint_K f^*(x, y) dx dy &= \lim_{|\Delta| \rightarrow 0} R(\Delta, \{(\xi_i, s_{ij})\}, f^*) = \lim_{|\Delta| \rightarrow 0} R(\Delta, \{(\xi_i, S_{ij})\}, f^*) \\ &= \lim_{|\Delta_X| \rightarrow 0} R(\Delta_X, \{\xi_i\}, F) = \int_a^b F(x) dx \\ &= \int_a^b \left(\int_c^d f^*(x, y) dy \right) dx \end{aligned}$$

□